



女性医師の窓

金沢医科大学女医会 水月会15周年記念について

赤澤 純代

今回は、金沢医科大学で15年前に産声を上げた「水月会」のお話を紹介いたします。

15年前までは女子更衣室もなく、男性医師とともに医局で着替えたり、当直したりというのが普通でした。大学内には、保育園はあるものの女性医師の数も以前は少なく、大学病院に併設の保育所は、看護師さんが働きやすくなるということが目的ということで女性医師の子供には、門戸が開かれていませんでした。

男性社会である医学の世界において、女性医師の立場は低く、また、女性教員のような産休・育児休暇などの代行のできる就労システムはできていませんでした。

なので、よほどの覚悟がないと生み育てて働き続けるというのは至難の道で、キャリアを中断したくなくともやめなければならない医師も出てまいりました。女性の平均寿命が22年間世界1位で85・81歳の現在でも、女性医師の寿命は、日本女医会の調べでは60歳代だそうです。

そこで立ち上がって下さったのは、世が世であれば、平家の時国家のお姫様である広瀬優子教授です。まだ、男性社会で女性医師の立場も低い中、ご夫婦で大学の教授をされ、さらに立派なお子さんをすばらしい成人にまで育てており、知・徳・体・美・医術(技)を兼ね備えたまさに、女性医師を目指す学生さん、女性医師のキャリアデザインのロールモデルであります。初代会長の広瀬優子教授を中心にその当時大学におられた小川淑美先生や土島 睦先生、榎戸美沙子先生、毛利雅美(柳下)先生などが、がんばられて発足されたとお聞きしております。3年前には、次世代を担って耳鼻咽喉科の特任教授であります鈴鹿有子先生にバトンを譲られ、今年、記念すべき水月会は“15周年”を迎えることになります。会員数は、現在、約100名で構成されており、会員の規定は、現役の金沢医科大学職員となっておりますが、これを機にOBを含めた組織に進化しようという構想があります。

昨年度、厚生労働省より、医師不足を背景に女性医師の就労に補助金が下りようになり、理由はさておき、男性の先生方も考えて下さるように世の中の流れが変わってまいりましたことは、とても喜ばしいことです。日本医師会においても、女性医師の支援活動が活発に行われるようになりました。もうじき医師の4人に1人25%に女医さんという時代がすぐそこまで来ております。具体的には、父の世代、昭和32年京大入学は、100名中女性3名で3%、私の時代は、昭和63年入学時は、100名中女子学生19名の19%、平成18年では37%、19年では41%、20年では30%と増加傾向を辿り、卒業時には、18年は38%、19年は41%、20年には42%と女子の占める割合が増しています。問題を先取りすると、女性医師のリプロダクティブ世代における就労形態の多様化の対応や病児保育・学童などが少子高齢化の日本において急務となっているように思われます。

石川県医師会も全国では早くに女性医師検討委員会が発足し、小森会長を中心に辻川委員長、魚谷委員、上田委員、大平委員、小川委員、沼田委員など活発に意見を交わし、日本腎臓病学会の発表にも使用されるすばらしい女性医師アンケート集が作成されました。7月5日には、スカイパーフェクトテレビのLaLa女性外来でも紹介されます。石川県医師会が、女子学生、研修医に向けたサポート活動を含め、会を開いたことにより、金沢大学麻酔学教室の山本教授の下、大学主催での女性医師のサポートの会が開かれたなど様々な活動が県内においても始動しております。本年度も、女性医師検討委員会の益々のご発展をお祈りしております。

また、金沢医科大学女医会：水月会総会は、2008年度6月20日（金）エクセル東急にて19：00より開催されますので、金沢医科大学OBの方を含め、ご興味がおありの先生方は鈴鹿有子教授メールアドレス suzie-nt@kanazawa-med.ac.jp へご連絡下さい。ご来賓の方も招いての会の予定となっております。



2006年鈴鹿教授へ広瀬先生からバトンをお渡しに
金沢医科大学水月会会長：鈴鹿有子 代 赤澤純代記



2002年 広瀬教授が会長の頃 榎戸教授、土島 睦講師を囲んで